

# 第7回 「日本語大賞」

テーマ「<sup>わたし</sup>私が<sup>つか</sup>使いたい<sup>ことば</sup>言葉」



高校生の部 文部科学大臣賞 受賞作品

## 美しい日本語

東京都

渋谷教育学園渋谷高等学校

2年 武 沙佑美

大好きな古語がある。

「潮垂る」。しほたる。青黒く広大な海が、一粒のしよっぱいしづくに凝縮され、頬をついと流れている。古代の日本人は、「袖を涙で濡らし、悲しみにくれる」ことを、このように表した。

六歳から四年間、米国に住んでいた。幼稚園を卒業してすぐ引越したため、ろくに国語の勉強もせずにアメリカの生活に浸った。日本語と触れ合うのは、毎週土曜日午前中に行われた補習校での授業だけ。補習校は、嫌いだ。周りのアメリカ人の友達は遊んでいるのに、どうして私は土曜日も学校に行き、教科書を音読したり、漢字の練習をしたりしなければいけないのだろう、と嘆いていた。そもそも日本語には漢字もひらがなもカタカナもあって、なんて面倒な言語なのだろう、とさえ思ったりしたものだ。

十歳で帰国し、小学五年生から日本の小学校に通い始めた。授業に慣れてからは日本語も苦痛ではなくなったが、やはり英語の勉強をしている方が楽しかったし、日本語より英語の方が好きだった。

中学校で、初めて「古典」という教科を習い始めたが、もちろん、乗り気ではなかった。現代ではまったく見かけない古語を、どうして学習しなければならないのか、わからなかった。法則も多いし、何を言っているのかも理解できない。授業は眠く、好き好んで取り組む科目ではなかった。

そんな時だった。清少納言が書いた、『枕草子』の序文「春はあけぼの」を、授業で扱ったのだ。「春は曙。やうやうしろくなりゆく、やまぎは少しあかりて、むらさきだちたる雲のほそくたなびきたる。…」で始まるこの文章の美しさに、ほれ込んでしまった。まるで言葉に色や温度や湿度や触感がつまみついていて、声に出すことでそれらがあふれ出て情景となっていくかのようなだった。どこまでも広い紺碧の空が、山の輪郭からにじみ出るような御来光によって、深い紫、ラベンダー、ピンク、オレンジと、徐々に明るくなっていく様子がありありと目に浮かぶ。

そこからは、日本語に夢中になった。特にとりこになったのは、百人一首だ。詠まれた途端に三十一字が生命を吹き込まれて一瞬にして風景を完成させたり、感情を形作ったりする。中学校で開催されていた百人一首大会には、大好きな一首「秋風に たなびく雲の絶え間より もれいづる月の 影のさやけさ」をとりたくて、毎年出場した。昔の私のように「古典なんて」と顔をしかめる人を見ると、気持ちは理解できるものの、悲しくなっ

てしまうほどだった。学校には、私と同じように小学校時代をアメリカで過ごしていたいわゆる「帰国生」がいたが、事あるたびに「古典が好きなの？」と驚かれてしまった。

いつの間にか、私は日本語に、純日本語ともいえる古文に、憧れを抱いていたのだ。あれほど美しい言葉を自分で紡ぎ出せたら。その場その場の瞬間を、どんな写真よりもビデオよりも生きた状態で、言葉におさめられたら。きっと、私のこころはより豊かなものになっていくと思う。